

【都市政策・地域経済コース ワークショップ I】 2018.06.22

10 回目 テーマ「大阪の現代アートと都市政策」(講義要旨)

講師: 木ノ下 智恵子 氏

大阪大学共創機構社会学共創本部(兼 21 世紀懐徳堂) 准教授

大阪大学社会学連携事業:アートエリア B1運営委員

講義日時 2018 年 6 月 22 日(金) 18 時 30 分~21 時 10 分

配布資料 木ノ下智恵子氏 プロフィールシート

●第一部 大阪の現代アート

①1970 年代、大阪万博を皮切りに現代アートが進んでいったと仮定義する。

- 1970 年に大阪府吹田市で開催された戦後初の国家事業である日本万国博覧会(EXPO'70・大阪万博)のテーマプロデューサーを前衛芸術家である岡本太郎がとめた。太陽の塔もテーマ館の一部として建造され、万博終了後も引き続き万博記念公園に残された。
- クリエイティブディレクターの登用メタポリズム建築(丹下健三、菊竹清訓、黒川紀章)
- 三井グループ館の総合プロデューサー山口勝弘、現代音楽家、吉原治良他の具体美術協会など
- 万博後の都市政策としては、モノレールが整備され、現代美術を取り扱う国立国際美術館や民族学博物館 大阪大学などの施設が設置された。

②大阪の都市・地域と芸術文化

- 大資本投下、公共性による事例

中之島地区再開発・水都大阪のシンボル/文教・文化ゾーン ※後述

北ヤード=メディアアート、ナレッジキャピタル

- 私企業、アーティスト等の個人、オルタナティブの事例

中崎町・中津、西成・新世界(パンタロン、イロリムラ、ココルーム、福寿荘、たんすなど)

北加賀屋・此の花(CCO、コーポ北加賀屋、千鳥文化、AIR 大阪 モトタバコヤ、the three konohana、梅花堂など)

③アーティストによるまちの使い方、コミュニケーションの方法

- 森村泰昌=大阪城公園、釜ヶ崎、心斎橋などの都市の風景を作品(写真)に組み込む手法。
- ヤノベケンジ=道頓堀などを舞台にしたアート船、万博公園の屋外彫刻の仮説設置
- コンタクトゴンゾ=梅田(ビックマン)におけるゲリラパフォーマンス

これらのアート(作品・行為)は、都市がもたらす表現の可能性(現実の転用・妄想化ファンタジー、日常の異化など)を実証している。都市を意識化(作品化)するのはアーティストの役割である。

●第二部 都市政策とアートの実践例(アートプロデュース)

①都市政策でこぼれた空間を美的に変える事例の紹介

- ・湊町アンダーグラウンドプロジェクト
- ・名村造船所跡地における30年間の芸術実験「NAMURA ART MEETHING'04-'34」、アーカイブルーム
- ・MASK(おおさか創造千島財団)ほか

②中之島地区の開発事業と文化政策の事例-その1:水都大阪 2009「ヤノベケンジとらやんの大冒険」

- ・中之島は大阪市の都市部に位置し、堂島川と土佐堀川に囲まれた水と緑豊かな環境と、国内有数の大企業等が立地する場所。
- ・中枢業務地区であるとともに、文化施設や歴史的建造物も多く立地するシンボルアイランドである。
- ・中之島のさらなる発展、活性化を目指して地区内の地権者企業等でアートエリアを創造。
- ・中之島駅が通過点としての駅ではなく、コミュニティ施設としての利用ができるという企画でイベントを実施している。

③中之島地区の開発事業と文化政策の事例-その2:アートエリア B1

京阪電車中之島線建設中の 2006 年から、企業・大学・NPO 法人が協同で、都市空間における駅の可能性を模索する「中之島コミュニケーションカフェ」を実施。これを継承して 2008 年 10 月の中之島線開業を機に、なにわ橋駅の地下 1 階コンコースに「アートエリア B1」を開設。この場は「文化・芸術・知の創造と交流の場」となることを目指して、大学の知、アートの知、地域の活力を集結した多彩な主催事業を展開している。この場は、アートは 1 日にしてならずの考えで運営されている。※「鉄道芸術祭」、「サーチプロジェクト」などを紹介

④行政・大学等々の共同事業の事例:大阪旋風プロジェクト

- ・大阪ならではの様々な魅力を探り・発信することで、新しい都市イメージを定着させることを目的に 2008 年 12 月からスタートしたプロジェクト。
- ・大阪大学コミュニケーションデザイン・センター、クリエイター、編集者、大阪市、大阪観光コンベンション協会が連携し、官・民・学が協働で取り組み。
- ・トークイベント等、プロセスそのものを公開しながら、最終的には 4 つのビジュアルファイルが完成。今後は、これらのビジュアルファイルを使って、多くの方々に新しい大阪魅力探しの旅をしていただきたいという願いをこめて、プロジェクトの歩みを報告されていく。

※アートツーリズム(ガイド)ブック『大阪観考』のプロデュースを紹介

第三部 ●まとめ

①社会的背景と世界の状況

社会背景・産業経済構造の変革に伴う芸術文化の拡張機能、芸術県境の整備から、社会的課題解決の方策へ。課題としてあげられるものは、戦後復興・低未利用地域・ブラウンフィールド・高齢化/過疎化地域のコミュニティー再生・医療福祉/就労支援などの社会的課題・人口減少/消費経済と産業/環境問題など
これらの解決策として考えられるものが、芸術やデザインの創造力により再生プロジェクト・都市魅力創造に資する芸術文化滋養の多様化・サイトスペシフィック・アートやコミュニティーアートの台頭ではないだろうか。

②芸術の拡張機能と都市政策

一所以と意義についての考察としては、アーティストの複眼性・新奇性・多目的の活用、アーティストの公共性と職能の社会化、主題の多様化と表現の親和性、思考と感性への問いかけの力、規制緩和の突破力・特権性と構想力・現場力・漂白された分かりやすさの危うさへの警鐘、モノゴトの見方・捉え方＝既知既存の価値変化などと考察される。これらの事から「芸術の超域力による人間性の回復と創造/想像力の醸成」、「発展都市する都市形成へ」の変革が求められると考える。

●第四部 質疑応答(抜粋)

Q) 大阪の都市が、中之島の船などインバウンドにかなり使用されている。ベースとして大阪市民が利用される方法はあるのか？

→象徴的なイベントをするのではなく、中之島のポテンシャルを活かした持続可能な取り組みが重要と考える。よって、中之島そのものを芸術試行のためのラボと見立てて、さまざまな実験をおこなっていかこうと考えている。ゆくゆくは拠点繋ぐラインをつくれるのではないかと。文化と経済の拠点として繋がるよう各イベントを具体的に鋭意計画中。

Q) 京阪電車なにわ駅アートエリア B1 は、立上げ当時、10年後の見通しはあったのか？

→まったくなくトライ&エラーで実施。企業・大学・NPO の三者が互いにカバーをしあう事で、仕組みを作ってきた。

Q) なにわ橋駅を活性化しようとした火付け役は誰か？

→京阪電車が駅の利用を考え実施。社会学連携で遂行していった。当時の組織長(京阪=佐藤 CEO、阪大=鷲田総長の存在は大きい。

Q) 千島土地株式会社の土地(名村造船所跡地)で実施しているアートプロジェクトは、大変お金がかかるのでは？その資金はどこからどのようにしてでてくるのか？

→「NAMURA ART MEETING'04-'34」や MASK は、おおさか創造千島財団との共催・主催事業として一部の予算を確保しつつ、そのほかは各種助成金や入場収入で賄っている。そのほかの企画については、財団が助成金のシステムを設置もしているが、基本的には各事業の主催者が運賃会場費や展示設備費を捻出していると思われる。

Q) アートと地域活性化を結びつけることにたいしてどのようにには考えていらっしゃるか？

→安易なアートと地域活性化には賛同できないが、結びつくかどうかはやってみないとわからないが、実験精神をもちトライし続けること。

どのように結びつけるか？つくっていくか。そのためには相手(都市や行政、施設管理者など)がYESといしやすい環境をたもち、相手に合わせて翻訳を変えること。

ただし、企画の骨子や作品性・芸術性はかえないように実施していかなければならない。

(筆責者 M18AA509 辰井菜緒)